

令和5年度全国学力・学習状況調査結果について

白馬村教育委員会

令和5年4月18日に実施された「全国学力・学習状況調査」について、今後の教育活動に役立てるため、本村の結果を分析しました。その概要をお知らせします。本調査での測定は学力の一部であり、学校教育活動の一側面です。

1 調査の概要

・調査内容

(ア) 対象学年 小学校6学年 中学校3学年

(イ) 教科に関する調査（小学校調査は、国語・算数 中学校調査は、国語・数学・英語）

(ウ) 教科学習に対する興味・関心、規範意識・自己有用感、生活習慣・学習習慣に関する調査

2 調査結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の概要

【小学校】

	全国平均正答率	長野県	白馬村	全国平均に比較して
国語	67.2%	66%	75%	上回る
算数	62.5%	61%	68%	やや上回る

【中学校】

	全国平均正答率	長野県	白馬村	全国平均に比較して
国語	69.8%	69%	73%	やや上回る
数学	51.0%	50%	51%	同程度
英語	45.6%	43%	47%	同程度

※中学校の全国、長野県は公立学校のための集計

(2) 教科に関する調査結果からの考察 ※ ○→成果や傾向 △→課題

【小学校】

①国語科

- 漢字の基本的な力を付けるために漢検を全員受けてきたことは、記述式などの文の中で正しい漢字を使う・書く力につながっているのではないかと考えられる(南小)。
- 「B 書くこと」では、普段の授業の中で自分の考えや思いをマインドマップに書く活動を取り入れてきたことの成果でもありと考えられる(南小)。
- 情報の扱い方に関する事項における、選択問題は県、全国に比べて高い正答率に加えて、無解答が0%というところが良かった。無解答が0%というところが選択問題では最後の一問以外はなかったというところも評価できるのではないかと考えられる(北小)。
- 1三(2)イ「くらべて」の送り仮名の適切なものを選ぶ問題では、正答率100%という点も評価できる(北小)。
- 選択問題はどの問題も正答率が県、全国に比べて高い。記述問題においても、3問中2問は県や全国に比べて正答率は10%以上高い。1問だけ5%ほど低かったが(1二)、条件①のa、②は満たしているが、条件①のbが満たされていないという、条件①の中でも二つ条件があるということで、見落としてしまった可能性もある。以上のことから、「記述だから書きにくい」「記述に苦手感がある」ということはなさそうである(北小)。
- △ ダブルの子どもの中には、日常会話は特に問題はないが、国語の学習となると苦手になる児童が見られる。日本語指導が必要なのではないかと考えられる(南小)。
- △ 1三(1)ア「いがい」同じく1三(1)ウ「きかん」の漢字を書く問いでは、無回答率が県や全国より高かったり、誤答率が高かったりしていることから、漢字の読みに比べると、書きに対して若干の苦手感があるというところは認めない(北小)。
- △ 3三敬語の選択問題では、正答率の低い原因が、「99上記以外の解答」の解答率が高かったため、答え方を単純に間違えてしまったと考えられる(北小)。

～今後の対策～

- ・ 一人一人が、自分の考えを持ち、言葉にしたり書いたりして、相手に伝えるような学習活動を継続していくことが大事だと考える(南小)。
- ・ 小学校では特に、マインドマップ等に自分の考えを書くというアウトプットの方法を取り入れている。どんどん思ったことを書いていくことが、タブレットなどにも書き込み、思考を深めていくことにつながるように感じる(南小)。
- ・ 国語科の力は、国語の授業だけでつくものではなく、様々な教科や生活全体の中でつくものだ

と考える。児童全員が自分の考えを持つ→相手に伝える→自分で再考する、という思考のスパイラルを教育活動の中で今後も意識していきたい（南小）。

- ・ ダブルの子どもたちが今後も増えていくことが予想されるため、日本語指導員が南小にも来ていただきサポートしていく体制をお願いできればと考える（南小）。
- ・ 「意外」という漢字は、経験上、今回に限らずどの年代の子どもたちも間違えやすいと思われるので、同訓異義語の学習や課題を定期的に出すということもしていきたい（北小）。
- ・ 正答率が高いという点よりも、無解答率が低いという点に注目したい。白馬北小学校の児童は諦めが早いと先生方がおっしゃっていたが、決してそうではないということがわかったので、諦めないで時間いっぱいまで考え、解こうとする子どもを育てていきたい（北小）。

②算数科

- 選択式・短答式・記述式いずれも、解答しようとする意欲は見られた（南小）。
- 多くの設問において、県や全国に比べて高い正答率である。3（3）の「 $(151 + 49) \times 3$ と $151 \times 3 + 49 \times 3$ 」の答えを求める問題では、4年生で習った計算のきまりで習った分配法則を用いればどちらも答えが一緒になることに気付くことができる。今回はそこに気付き、正確に答えを出せた児童が多かったため、正答率が県や全国より9ポイントも高くなったのではないかと（北小）。
- どの設問も県や全国を上回る正答率か同等の正答率となっている。2（4）の図から分かることを選択肢から選び、その理由を書く問題では、県や全国に比べ17ポイントも高い。三角形の面積の公式である、「底辺×高さ÷2」をちゃんと理解しているからこそ、底辺と高さが同じであれば、どんな形の三角形であろうと面積は同じという考えができ、正答を答えられたと思われる。また、4（3）の図から分かることを書く問題は、例示された文章があり、それにならって記述すればよいという点を把握できた児童が多かったため、県に比べて15ポイント、全国に比べて13ポイント高くなったのではないかと（北小）。
- △ 図形の問題2（3）は選択式だったので、全員解答はしていたが、三角形の意味や性質について問われ方が変わると迷ってしまう児童がいた。2（4）は、記述式ではありながら全員が解答していたが、二つの条件を満たして記述できる子が26%しかいなかった。図形の意味や性質はわかっているにもかかわらず、問われ方が変わると答えられない様子が見られた（南小）。
- △ 1（1）では、増加数のきまりに気付くことができれば、容易に答えられる問題であるが、本校は、68と解答している児童の割合が県、全国に比べ4ポイント近く高いことと、99上記以外の解答をした児童の割合が3ポイント近く高い。68と答えた児童に関しては、単純に計算間違いをしたと考えられるが、99上記以外の解答をした児童に関しては、不明である。ただ、文

章、図や表を正確に読み取ることができれば、正答できる問題であるので、焦らず丁寧に読み取ることが課題となると思われる（北小）。

△ 2（3）、（4） 4（1）は県、全国も同様に正答率の低い問題であった（北小）。

2（3）はテープを半分に折り、折り目から斜めに切って正三角形を作るには折り目のある頂点ケの角度Aを何度にするかという問題。正三角形なのでどの角度も60度にならなくてはいけない。頂点ケの部分は半分に折られているので、角度Aは60度の半分30度が正答となる。しかし、その半分に折られている点がイメージできていなかったのか、60度と答えている児童が、全国、県ともに30%以上、本校に至っては46%以上いた。

2（4）は、「選択」と「理由の記述」という2つの解答パターンがある。選択肢で間違える場合、理由の記述で間違える場合もあるため、どちらも正解するには三角形の性質を正しく理解できていないといけな。選択肢は合っているにもかかわらず記述で間違えてしまうこともあったため、正答率が低くなったと考えられる。

4（1）は割合の問題である。選択問題ではあるが、2つ選ぶという点、30%の意味が分からないと答えられないという点から、正答率が低くなったと思われる。県、全国、本校で間違えた割合が20%前後と多かったものは、「ア、エもしくはイ、エと解答」であった。次に13%前後で「ア、オもしくはイ、オと解答」が多かった。県、全国はその次に12%ほどで「ア、ウもしくはイ、ウと解答」が多かったので、アもしくはイを選択して間違えてしまった児童が多いと考えられる。しかし、本校は、「ア、ウもしくはイ、ウと解答」した割合は5%弱と低いので、本校の場合には一概に言えない。

～今後の対策～

- ・ 割合の問題は、毎年、苦手な子が多いので、いろんな場面で割合の考え方を取り入れていくように算数の授業等で意識したい（南小）。
- ・ 加減乗除の基本問題をくり返し解き、基礎的な計算力を高める（南小）。
- ・ 総合教育センターのクリア・チャレンジ問題を活用し、問題に慣れる（南小）。
- ・ 図形の定義など本質的な部分で理解が弱い点も見られるので、答えが分かれば良いという考え方からの脱却を目指したい（南小）。
- ・ 全体的には国語と同じく無解答率が0%という問いが多かったのは良かったが、選択式の問題での無解答が県や全国に比べて高かった問題が2問あった。無回答となった原因についてより分析をして必要な対策を講じていきたい。ただ、前述のとおり、どんな問題か、何を答えればいいのか、そのために読み取るべきことは何か、ということを常に考えて取り組むことを行っていけるよう取り組んでいきたい（北小）。

【中学校（3 学年）】

①国語科

- 「B 書くこと」と「C 読むこと」の領域では、全国平均を大きく上回った。
- 「A 話すこと・聞くこと」の領域において、「インタビューの前に準備したメモについて説明したものとして適切なものを選択する」問いと、「相手の話を受けて発した質問について、述べ方の工夫とその意図を説明したものとして適切なものを選択する」問いの正答率がやや低かった。

両方の設問に共通しているのは、「なんのための」メモや質問なのか、といった「目的や意図」を正しく読み取る力が問われていることである。

～今後の対策～

- ・ 「A 話すこと・聞くこと」の領域の正答率が低い原因として考えられるのは、授業で「話すこと・聞くこと」に関する言語活動の経験が不足していることがあげられる。生徒自身がインタビュー活動の質問者となって、メモを作成することや、質問の答えに対してさらに問いを重ねることなど、双方型のやり取りの中で、力をつけていきたい。

②数学科

- 「D データの活用」四分位範囲の意味を理解しているかどうかを問う問題および複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかをみる問題では、全国平均正答率を上回っていた。昨年度「D データの活用」の領域で、「100年後の白馬の平均気温を予測する学習活動」を取り入れたことを通して、思考力・判断力・表現力を高めることをめざした。独自のデータ収集をもとにこうした学習活動を位置づけていく。
- △ 「B 図形」空間における平面が同一直線上にない3点で決定されることを理解しているかどうかをみる問題および「C 関数」反比例の意味を理解しているかどうかをみる問題では全国平均正答率を下回っていた。図形領域では具体物の操作を通して知識への理解を深めたり、関数領域では google スプレッドシートを活用して表・式・グラフを関連づけて考察したりする活動を位置づけることを通して、習得・活用のサイクルを回していきたい。

～今後の対策～

教科会として以下の2点について進めたい。

- ・ 各教材の共有化を図る。
- ・ 単元内容に応じて指導時数を弾力的に調節する。

③英語科

- 「聞くこと・読むこと・書くこと」のテストにおいても「話すこと」のテストにおいても正答率の高い生徒が多く、英語の力が高い生徒が多いことがわかる。
- 「聞くこと」、「話すこと」は全国平均正答率を上回った。特に「自分の考えや理由を述べる」という趣旨の問題の正答率が高い。
- △ 設問別に見ていくと、「～について正確に書くことができる」という趣旨の問題の正答率が低い。

～今後の対策～

- ・ 成果については、「聞き取った内容について話す」活動や「読み取った内容について話す」活動を単元末に設定し、継続して指導を行ってきた成果であると考えられる。今後もそういった活動を継続していく。
- ・ 「書くこと」の正答率が低かったので、「話すこと」に関する活動とバランスを取りながら単元末の活動を考えていく必要がある。
- ・ 「正確さ」よりも「流暢さ」に重点を置いて指導していることが結果からわかるので、こちらもバランスを取りながら、「正確に書く」ことにも重点を置いていくようにする。

(3) 教科学習に対する興味・関心、規範意識・自己有用感、生活習慣・学習習慣に関する調査の結果 の特徴的な事項について

【小学校】

- ・ 国語・英語の勉強は、6年生児童全員が大切だと思っている。また、算数は社会に出てから役立つと全員感じている。ほとんどの児童が将来の夢や目標をもっており、今学んでいることが、自分の将来にもつながることを感じている。(南小)。
- ・ 読書が好きな子が90%と高い結果が出た。普段から図書館へ足を運び、読むことに親しんでいる姿が見られる(南小)。
- ・ 学んだことを生かしたり、課題の解決をしたりするときに、自分で考え自分から取り組める子どもたちが増えている。各教科の学びの中はもちろんのこと、学校生活の様々な場面(児童会活動・縦割り班活動など)でもその力が見られている(南小)。
- ・ 「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」という問いで、本校では「よくしている、時々している」の割合が合計で55.9%、「あまりしていない、全くしていない」の割合が合計で44%と、ほぼ半々に対し、長野県が「よくしている、時々している」73.6%、「あまりしていない、全くしていない」26.4%、全国が「よくしている、時々している」69%、「あまりしていない、全くしていない」29.2%と、差が大きい。自主学習のような形で宿題を行うということも考えていく必要があるのではないか(北小)。
- ・ 「1日あたりどのくらい読書をしますか」という問いでは、2時間以上すると答えた児童が、全国では7.6%、長野県では7.1%に対し、本校では25.6%と、大幅に多い。朝読書であったり、休み時間に本を読む児童もいたりすることが要因であると考えられる。また、「家にどのくらいの本があるか」という問いに、201~500冊が23.3%(全国11%、県11.2%)、500冊以上が16.3%(全国4.3%、県3.9%)と、とても高いことも要因の一つと言えるのではないかと(北小)。
- ・ 「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」という問いで、「ほぼ毎日」「週3回以上」と答えた児童を合わせた割合が、全国62.4%、県57.5%であるのに対し、本校は83.7%ととても高い。ICT機器の導入後、積極的に使用してきたことが表れているのではないかと。また、これは先生方が積極的に使ってきたからとも考えられる(北小)。
- ・ 「英語の勉強は好きですか」という問いは、全国69.3%、県68.8%に対し、本校は90.7%と非常に高かった。英語専科やALTが授業を工夫して行っていることも要因であるし、外国籍の児童と活動を楽しんでいるということも要因であると思われる(北小)。

【中学校】

- ・ 国語、数学において、「好きである、大切だと思う、将来役に立つと思うか」では、全国より下回っているのに対し、英語については大きく上回っている。白馬の地域特性として、外国由来の方が多いこと、外国からの観光客や移住者の割合が多いことがあげられる。そのような環境で育ち、特性に応じた教科学習や総合的な学習の時間を行っていることから、「英語の必要性や将来への見通しをもつこと」、「外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたいと思いますか」や「日本やあなたが住んでいる地域のことについて、学国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか」の割合が全国より大きく上回っている。
- ・ 「将来の夢や目標を持っていますか」や、「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」及び「今住んでいる地域の行事に参加していますか」と「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」についても大きく上回っている傾向がある。白馬という地域が世の中から注目され、未来に明るいイメージや実感を持たせてくれていることや、実際に白馬で活躍する方々と身近に話ができる環境にあることも要因の1つとして考えられる。そんな中で、地域に貢献したり、地域の人と交流することを大切に考えている生徒が多くなっている。

3 学力向上に向けた全般的な傾向と今後の取組

【全 般】

平均正答率が、すべての教科について全国や県の平均に比べて高くなっているが、平均正答数と中央値にズレがあるため、正答数に二つの山ができています。検査人数が少ないと、こういう現象はよく見られるが、白馬村ではすべての教科について表れている。特に中学校の数学科では顕著に表れており、こうした結果は学力の二極化と言われている。中学校の英語科は、全国分布と似た形をしているが、平均点を押し上げている要因は、正答数上位層の割合が多いからである。この状況を打開し、学力が十分身に付いていない児童・生徒にも確かな学力を身に付けさせることは、これからの大きな課題となっている。

算数科や数学科は文章問題の量が多く、問題の意味を読み取るのに時間が掛かっていると思われる。単なる計算問題よりも設問の中身を理解して読み取る力が必要な問題は、これからも増加して来よう。日常生活における現象等を身近にとらえ数学的に解析できる力を身に付けることが、数学的な考え方・論理的思考に結び付くと考えられる。

【学校の取組】

- (ア) 対話活動を取り入れて、自分の考えや思いを伝え合える子どもたちを育成する（南小）。
- (イ) 教師が、子どもたちの学びをつないで、子どもを主体とする学びを構築していく（南小）。
- (ウ) 算数でもほかの教科でもそうだが、「何を聞かれているのか」を読み取る力が必要であるので、国語の力を上げていくような宿題であったり、ドリル的なものを行ったりしていくようにしたい（北小）。
- (エ) 授業のワークシートなどで、ラーニングマップを取り入れていきたい（北小）。
- (オ) 授業改善（中学）
 - ①自分の学び方の特徴を知り、より深い学びとなるように、個別最適な学びを選択し、実践する場や問いを整理し、積み重ねていく。
 - ②授業のねらいを達成させるために魅力ある学習課題（内容、提示の仕方等）の設定を工夫する。
 - ③授業終末時に学習課題についての達成度を振り返る時間を確保する。
 - ④考えを伝え合う言語活動を基盤として、共に課題を解決し、自分の考えを深めることができる「主体的・対話的で深い学び」の実践を積み上げていく。
 - ⑤基礎・基本の定着に向けては、授業の中で繰り返し学習する場を設定する。
 - ⑥補充的学習や発展的学習に積極的に取り組むようにする。家庭でも計画を立てて行えるような工

夫をする。

⑦学習環境を整備するとともに、一人一人が体験的に学べる場を設定する。

⑧個人探究できる時間の確保と地域との結びつきを密接なものとし、村全体が学びのフィールドとして活用できるように連携を深める。

(カ) 授業における I C T機器の活用 (中学)

①資料、写真等やシュミレーションソフトを使い、場面提示を工夫する。

②機器を用いた共有や効率化と個別の追究を棲み分けることで、混在を防ぎながら評価活動につなげていく工夫を行う。

【教育委員会の取組】

(ア) 各校の実情に応じた村費による教育支援員 (講師) の配置。

(イ) 小学校の英語学習支援員の配置。

(ウ) 学校支援コーディネーターを配置し、コミュニティ・スクール (地域の教育力を活かした学校教育) の充実。

(エ) I C T学習環境支援員を配置し、I C T機器の利活用の推進。

(オ) 前年度に引き続き、学力向上対策委員会で作成した「学習の手引き」(家庭学習の手引き) の活用促進。